【主催】愛知県陶磁美術館、愛知県教育委員会、
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター

朝日講座

連続講座 1

2016年8月27日（土）13:30～
愛知県陶磁美術館本館 講堂
埋蔵文化財展「弥生への旅　朝日遺跡」

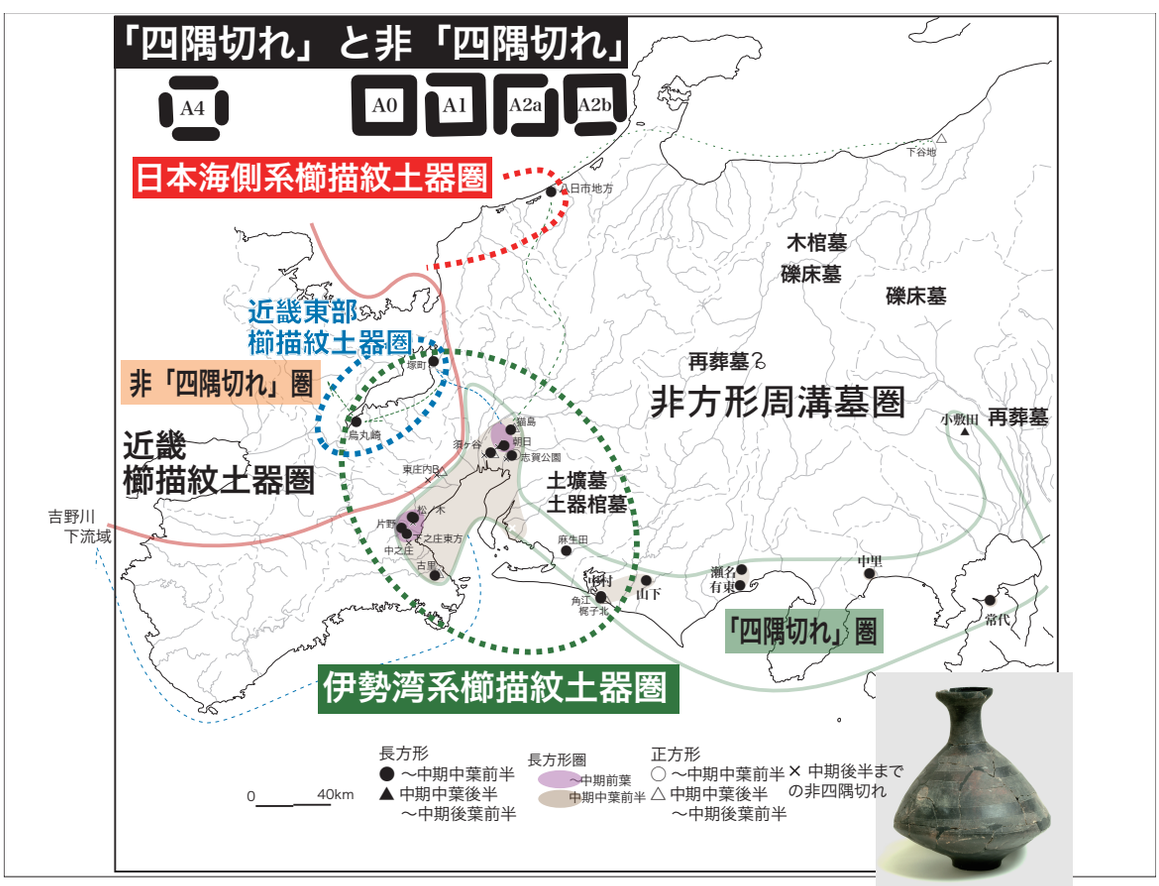
朝日遺跡総集編

□倭国への歴程□

石黒立人

（愛知県埋蔵文化財センター専門委員）

キーワード：倭国、移住集団、国邑、逆茂木、四隅切れ、玉、朝日ブランド、海民



お問い合わせ先
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ケ須町野方 802-24
Tel. 0567-67-4163　Fax.0567-67-3054
http://www.maibun.com/top/

続編

③変革期：BC2 世紀から AD1 世紀初め

ア）新たな移住者たちの〈表徴〉
・席巻する〈凹線紋系土器〉
・土器作りの転換は何を意味するのか
・高坏に代表される台付器種への執着

イ）新たな集落プランと墓制の変革
・井戸と大形掘立柱式建物
・1 隅切れ方形周溝墓の席捲
・多数埋葬の意味

ウ）円窓付土器の隆盛
・生産量の急激な増加
・西方への分布拡大

エ）鹿線刻画と銅鐸
・鹿の意匠が示す〈神話的世界〉
・銅鐸形土製品にみる「見る銅鐸」の兆し

オ）矢作川流域からの活発な移動
・古井式土器の活発な搬入
・新たな集落の成立

カ）漁撈活動の変質
・海民から海洋交易民へ
・舟型木棺の意義

キ）次なる「国」として
・伊勢湾岸社会の動向
・「倭国」時代の朝日遺跡とは

④競合期：AD1 世紀から AD2 世紀

ア）複数環濠の併存
・銅鐸埋納と新たな環濠の掘削
　入り口と方形周溝墓
・北環濠と上位階層
　複数区画　精巧な木製品

イ）多種の青銅製品
・銅滴と青銅器鋳型？
・生産の実態

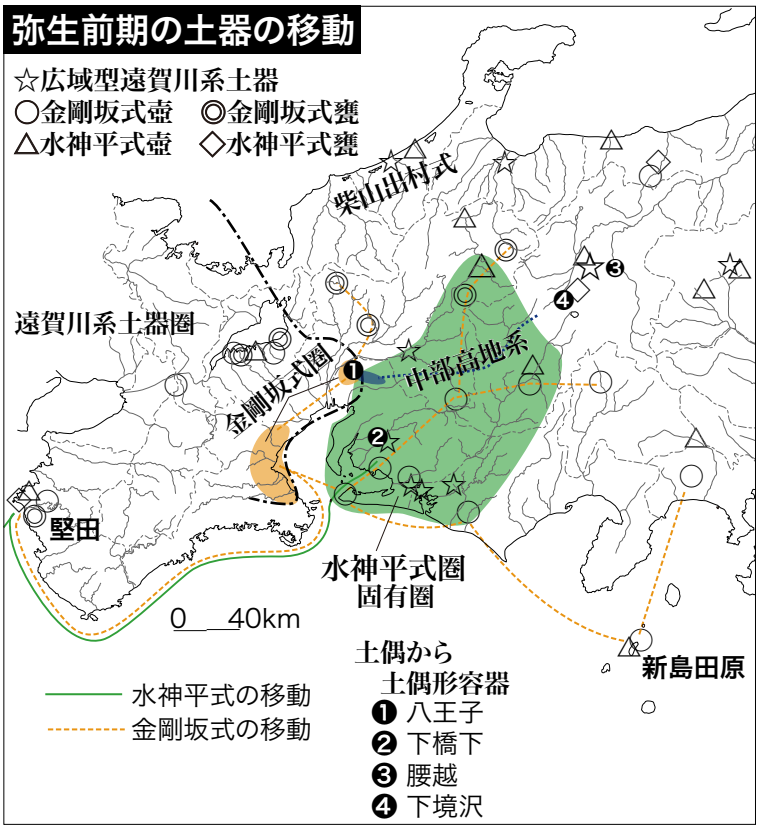
ウ）南西端墓域の不思議さ
・環濠（壕）に隣接しない独立した墓域
・精巧な供献土器
・群集する土坑墓
・〈居館〉近傍の疑い

⑤衰退期：AD3 世紀～

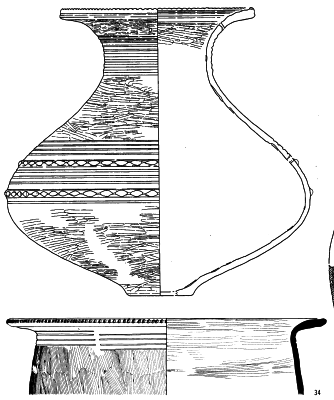
ア）環濠の廃絶
・埋まるままに
・ヤナの設置と淡水漁撈

イ）湿地化の進行と荒廃
・集落の移動
・広がる葦原

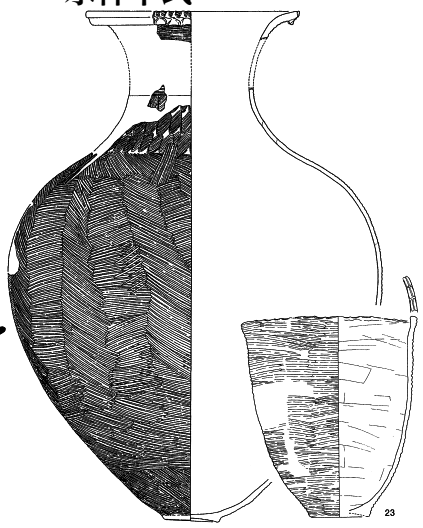
弥生前期の土器の移動



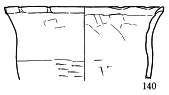
金剛坂式



水神平式

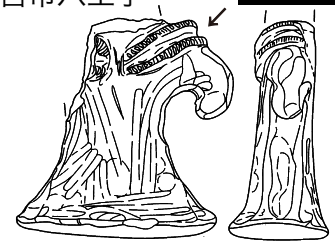


中部高地系
（三ツ井形甕）



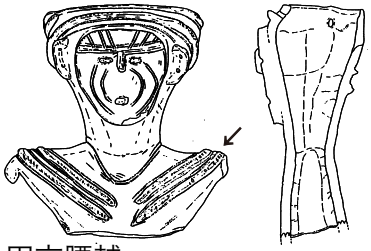
土偶から土偶形容器へ

❶一宮市八王子



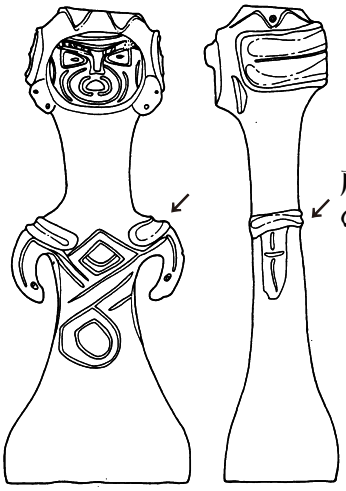
土偶

❷安城市下橋下



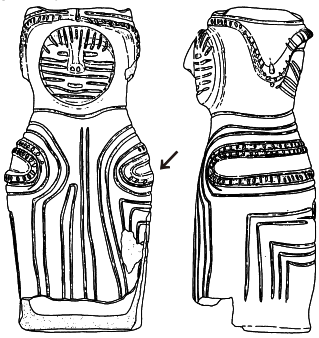
土偶形容器
（蔵骨器）

❸上田市腰越



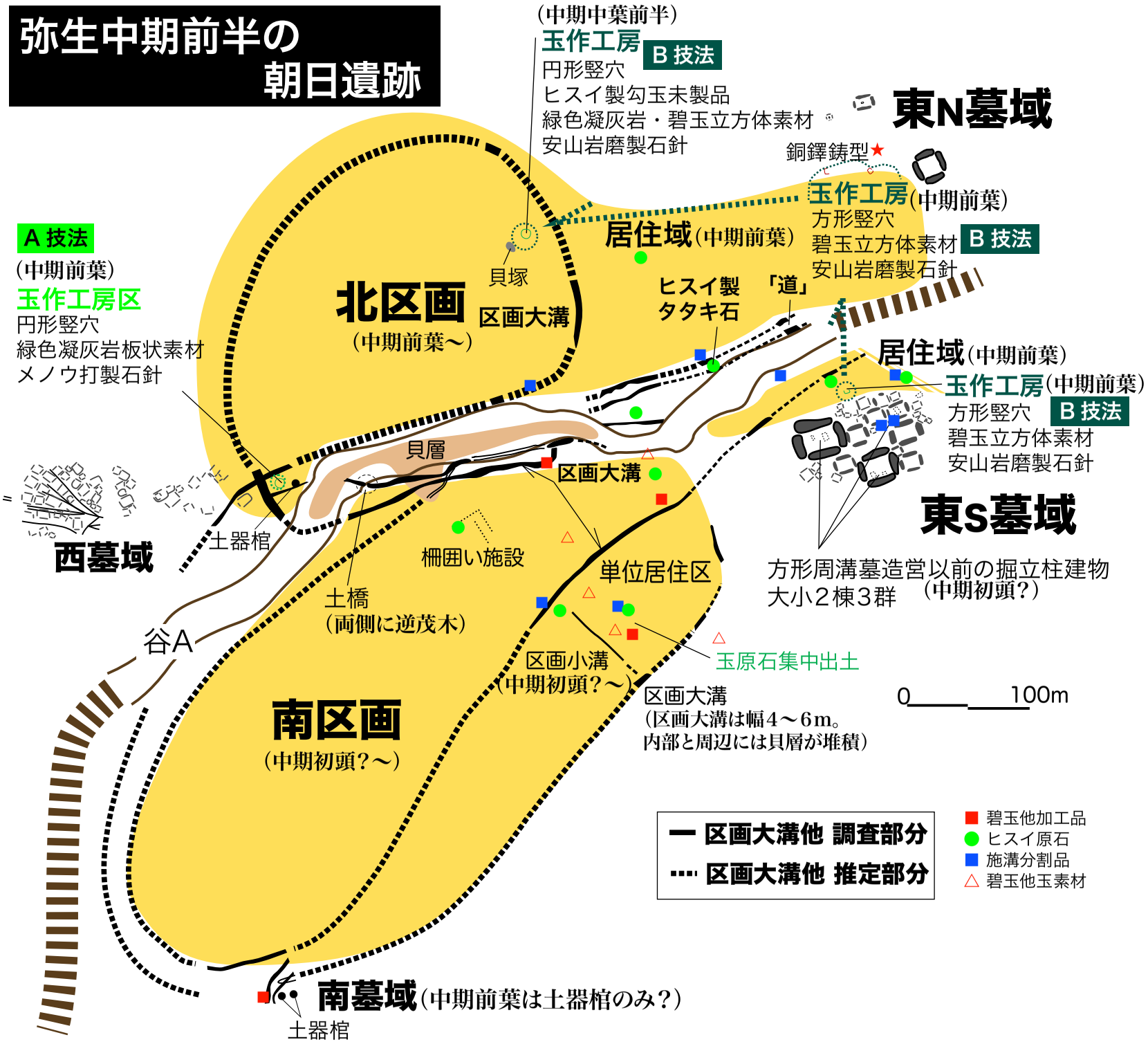
肩パット状突帯
の類似

❹塩尻市下境沢

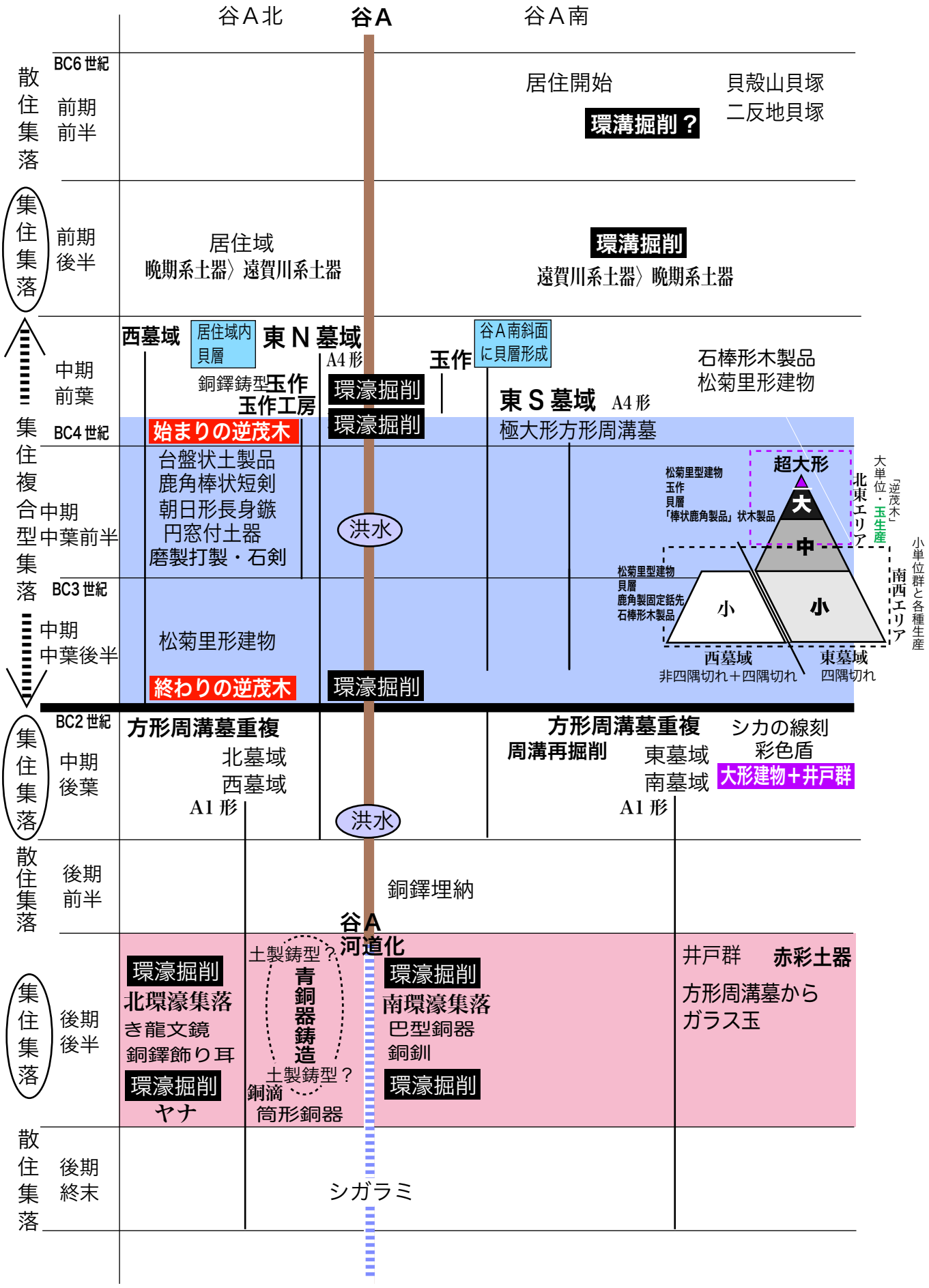


※縮尺不同。下境沢例は報告書掲載の側面図を
反転して位置を変えているので注意。

弥生中期前半の朝日遺跡



朝日遺跡変遷概略


谷Ａ北
谷Ａ
谷Ａ南
BC6 世紀
散住集落
前期前半
居住開始
貝殻山貝塚
二反地貝塚
環溝掘削？
集住集落
前期後半
居住域
晩期系土器〉遠賀川系土器
環溝掘削
遠賀川系土器〉晩期系土器
集住複合型集落
中期前葉
西墓域
居住域内貝層
東Ｎ墓域
A4 形
玉作
谷Ａ南斜面に貝層形成
石棒形木製品
松菊里形建物
銅鐸鋳型
玉作
玉作工房
環濠掘削
環濠掘削
東Ｓ墓域
A4 形
BC4 世紀
始まりの逆茂木
極大形方形周溝墓
中期中葉前半
台盤状土製品
鹿角棒状短剣
朝日形長身鏃
円窓付土器
磨製打製・石剣
洪水
超大形
大
中
小
小
松菊里型建物
玉作
貝層
「棒状鹿角製品」状木製品
北東エリア
大単位・「逆茂木」玉生産
小単位群と各種生産
南西エリア
松菊里型建物
貝層
鹿角製固定銛先
石棒形木製品
西墓域
非四隅切れ＋四隅切れ
東墓域
四隅切れ
BC3 世紀
中期中葉後半
松菊里形建物
終わりの逆茂木
環濠掘削
BC2 世紀
集住集落
中期後葉
方形周溝墓重複
北墓域
西墓域
A1 形
方形周溝墓重複
周溝再掘削
東墓域
南墓域
A1 形
シカの線刻
彩色盾
大形建物＋井戸群
洪水
散住集落
後期前半
銅鐸埋納
谷Ａ
河道化
集住集落
後期後半
環濠掘削
北環濠集落
き龍文鏡
銅鐸飾り耳
環濠掘削
ヤナ
土製鋳型？
青銅器鋳造
土製鋳型？
銅滴
筒形銅器
環濠掘削
南環濠集落
巴型銅器
銅釧
環濠掘削
井戸群
赤彩土器
方形周溝墓から
ガラス玉
散住集落
後期終末
シガラミ

朝日遺跡総集編　□倭国への歴程□

●本編

1.中華からみた倭国の成立

①BC108 年：楽浪郡設置　倭人が前漢王朝へ朝貢（漢書地理志）*1

・『漢書地理志』には「100 余」の国があったと記される。「楽浪海中に倭人あり、 分ちて百余国と為し、 歳時をもつて来たりて献見すと云ふ」

→「国」とは何を指すのか。現代の学問的国家論は別にして、そこに記された「国」は大きなものではないだろう。日本古代の「郡」程度か？都市国家連合である商（殷）の都・殷墟でも 20km 圏が直轄圏（王が見回れる範囲）に過ぎないという。その外には非定住の採集狩猟民である「夷」がいたとされる。『三国志魏書韓伝』によれば「韓」には 50 余の「国」があり、都が「国邑」*1。大は「万余家」、小は「数千家」。

→「倭人」の「国」の人口は『三国志魏書倭人伝』では「対馬国」：千余戸、「一大国」（壱岐）：三千ばかりの家、「末盧国」（松浦郡）：四千余戸、「伊都国」（伊都郡）：千余戸、**「奴国」（福岡平野）：二万余戸**、「不弥国」（嘉穂郡？）：千余戸、**「投馬国」（岡山平野？）：五万余戸**、**「邪馬壹国」（大阪平野？）：七万余戸**、となっており、島や山と海に囲まれた地理的単位で千戸台、平野を含み広くなると万戸台・・・。

②建武年間（AD25～56）に東夷が朝貢（後漢書東夷伝）

→BC108 年までの「東夷」は山東から淮河（黄河と長江の間の河）下流域の異民族を指したが、以後は遼寧から日本列島までの異民族（扶餘・濊・貊・韓・倭）を含めた。南蛮・北狄・東夷・西戎は「中華（中原に同化した民族）」以外の民族を指す。

③AD57 年：北部九州（博多湾沿岸）にあったとされる倭奴国の「王」が、後漢の光武帝から倭奴国王に冊封されて、金印（委奴国王印）が賜与（後漢書倭伝）

④AD107 年：倭国王帥升が後漢へ遣使し、生口（奴隷）を 160 人献呈（後漢書倭伝）

→主要な生産品ではなく「生口」が嶽上品である点に倭国の価値観を反映。生身の人間が最上位の価値を帯びるということであれば、AD2 世紀の倭国乱も奴隷獲得のためならあまり政治史に関係するようにも思えない。

→「生口」が弥生時代の社会秩序の中でどのような存在であったのか考古学的には明らかではなく、現代考古学者の視野にも入っていない。戦後、登呂遺跡に仮託した原風景的かつ牧歌的な弥生農村も、“幸せな明るい農村”ではなく奴隷を含めた労働力を駆使することで成り立っていたとすれば、イメージは大きく変わる。*2

⑤AD3 世紀後半：30 余国から通訳を連れた使者が帯方郡や都にくる（三国志魏書倭人伝）

⑥『三国志魏書倭人伝』の重要事項

男子は長幼の別なく顔・体に入墨（**尊卑の違いあり**）　鉢巻　貫頭衣　稲・苧麻・桑（**養蚕**）・紡織　矛・盾・上長下短の木弓・竹矢・鉄鏃・骨鏃　**生野菜**　徒跣（はだし）　朱・丹で化粧　籩豆（**木製の高坏**）・手づかみ　棺はあるが槨（墓室）は無い　塚　服喪号泣・歌舞飲食　澡浴（みそぎ）　持衰　**生口（未開野蛮な人間・奴隷・捕虜 etc）**　真珠（貝玉？）・青玉　山から丹（朱？）　灼骨卜占　集会での振る舞いに父子・男女の別なし　**大人に対して拍手・蹲（つくば）る・手を着き跪（ひざまず）く**　一夫多妻　重罪族滅　**尊卑の等級**　邸閣（租税の収蔵庫）　市場と監督官　黄幢（軍隊が用いる旗）倭国乱　**鬼道**　親魏倭王・金印紫綬　**狗奴国**　大きな冢（百余歩）　殉葬・奴婢　**卑弥呼・壹与**　※『三国志魏書弁辰伝』によれば「男女ともに倭に近く、また文身している」という。果たして、倭は海峡をまたぐのか？

参考文献　井上秀雄他訳注　1974『東アジア民族史 1 正史東夷伝』東洋文庫 264　平凡社

*1 史書の成立は、『史記』BC91 年頃、『漢書』AD82 年頃（or75～88 年）、『三国志』AD３世紀後半、『後漢書』AD5 世紀前半であり、倭に関しては中の二書が重要である。

*2 弥生時代における政治・社会的な変化をめぐる地域差（単一ではない弥生時代・文化）は当然だが、だからこそ史書の記述の適用範囲が問題となる。

2.朝日遺跡と伊勢湾岸の弥生ヒストリー

①成立期：弥生前期（BC7 世紀から BC5 世紀）

ア）移住集団による水田稲作の開始

・渡来者の足跡

渥美半島の付根、豊橋市高師原で採集された大陸系有柄式磨製石剣の柄片、長野県木曽谷・大桑村田光松原遺跡の礫で覆われた特異な木棺（周辺からは管玉も出土）、さらに遡った松本盆地・石行遺跡の大陸系系有柄式磨製石剣の切先片などは、石剣を佩用した人物の往来と客死に伴い丁寧な埋葬を行った渡来者たちの姿を映し出す。朝鮮半島系要素の松菊里型建物は、初期の事例が松阪市筋違遺跡・四日市市大谷遺跡で見つかっている。朝日遺跡では弥生前期は不明だが、中期前葉には朝日遺跡や名古屋市志賀公園遺跡などで見つかっており、普及が進む。北部九州系文物を除けば、和歌山県堅田遺跡や高知県田村遺跡で出土している円礫素材の収穫具の共通性も重要。伊勢湾西岸域や濃尾平野への移住経路は近畿内陸

ではなく太平洋岸や日本海沿いに行われた余地もある。その経路はすでに縄文晩期には存在し、在来集団との情報共有があって移住が実現できた。

・中部高地からの移住集団

濃尾平野の縄文晩期系土器には条痕紋系土器とは別の一群が存在する。「口外帯」をもつ三ツ井形甕がそれで、壺や浅鉢はわずか。初めは濃尾平野北西部に、その後南東部へと分布を広げる。初期例が見つかった一宮市三ツ井遺跡では遠賀川系土器とともに同時期の可能性が高い水田遺構も見つかっており、在来の縄文晩期系土器（条痕紋系土器）使用者がアワ・キビ栽培に傾斜しているのと対照的である。遠賀川系土器分布圏に随伴していることに水田稲作との関係の深さが窺える。

イ）伝統文化と外来文化、その出会いと変容

・異なる技術の共存、そして融合

朝日遺跡では遠賀川系土器独特の焼成法である「泥窯」焼成で生じた焼けた粘土塊が出土している。一方、条痕紋系土器は伝統的な「野焼き」である。朝日遺跡の条痕紋系土器は搬入品であり、同所で焼成されたものではない。遠賀川系土器の壺の口縁部には蓋を結ぶ紐穴があるが、条痕紋系土器にはまずない。しかし、高蔵遺跡の条痕紋系壺には１点だが焼成前に穿孔されたものがあり、両系の製作者が共存していた可能性がある。

弥生前期には壺の比率が急上昇する。稲籾の貯蔵具というが、稲は穂摘み（もしくは穂刈り）された一握りの穂束が単位（北条芳隆の指摘）であり、壺での保存は明らかではない。高さ 60cm を超える大形壺も中期で終わる。2ℓ（4 合炊き）～5ℓ（10 合炊き）を基本とする甕は蓋を伴っており、炊飯具である。しかし、20ℓを超える大容量の甕を調理具に限定するわけにはいかない。縄文晩期以前の大容量器種はドングリ煮沸用とされるが、弥生前期には新たな用法を想定する必要もある。なお、朝日遺跡や西志賀遺跡の貝塚や貝層から出土する遠賀川系甕には吹きこぼれ痕が無く、また内面の変色が薄く下半がアバタ状に変化したものがある。同類は条痕紋系にもあり、海産貝の煮沸用であった可能性が高い。

・溝で囲うこと

北部九州から伊勢湾岸域まで遠賀川系遺跡はしばしば大溝で囲まれる。環濠（壕）集落の始まりである。溝を掘削することで、[居住域・墓地]〈人間界〉と[森・草原]〈自然界〉という空間区分を示した。瀬戸内以西では貯蔵穴を囲み財産の安全が図られた。環濠（壕）集落には同心円的に拡張されて多重円をなすものの他に別区が併設されるものもある（春日井市松河戸遺跡、貝殻山地点？）。どちらも居住集団の増加に対応するが、後者は内部の人口増ではなく後続する集団のために用意された。

・縄文デザインの継承

縄文晩期の東日本に分布した頭部から斜めに紐穴を穿つ棒状鹿角製品は、弥生前期には同じ紐穴形状を保ったままＹ字鹿角製品を派生させて両者とも伊勢湾から近畿にかけて分布するようになる。頭部と身部の境界に施された陽刻の紋様帯は網状紋→工字紋（陰刻楕円流水紋）→刻み入り楕円形突起と推移し、いずれも特別な土器を飾る紋様に対応する。そして、弥生中期には紋様を喪失して中国地方東部にも分布を広げる。こうした一連の変化に朝日遺跡や西志賀遺跡は深く関わっており、朝日遺跡の弥生中期中葉に属す網状紋資料も伝世が疑われる点で無視できない。

②発展期：弥生中期前葉から中葉後半（B C4 世紀から BC2 世紀）

ア）最初の「国邑」*3 として

濃尾平野には朝日遺跡クラスの大規模集落が西北西 9km の青木川・三宅川軸にも存在した。稲沢市野口北出遺跡・須ケ谷遺跡であり、南北端で 800m 程となる。しかし、朝日遺跡と異なり遺跡形成途中に砂層を挟み、洪水の頻発を窺わせる。洪水が集落を廃絶させるまでには至らないものの集落経営・組織運営にとってリスクは大きく、周辺の遺跡を含めて絶えず移動（避難！）の契機を孕むことになる。朝日遺跡の南西 4km と近いあま市阿弥陀寺遺跡でも洪水痕跡があり、土器の 40%近くが搬入品であった。日光川水系の一宮市西上免遺跡ではさらに搬入比率が上昇しそうである。これらの地域では中期中葉に「非朝日形甕」が分布するのに対して、朝日遺跡や西志賀遺跡では中期前葉以来変化もわずかな「朝日形甕」が主であるのも、製作環境の安定、持続性の強固さによるところが大きいだろう。つまり、地域の核であるかどうかには場所の安全性も大きく関わり、朝日遺跡の周辺に遺跡が分散せず集中するのも、朝日遺跡の安定が人口集中につながっていたことを示す。

イ）最初の「逆茂木」と「四隅切れ」超大形方形周溝墓（上位階層の登場と秩序形成）

・朝日遺跡北区画の優位性

居住域は弥生前期（BC6～5 世紀）にも拡大した（10,000 ㎡→25,000 ㎡）が、中期前葉（BC4 世紀）にはさらなる広域化（200,000 ㎡）に合わせて幅３～５m、深さ 1.5m 以上の大溝を掘削した。北区画を囲む溝（長径 300m）は南辺で多重化し、「土橋」付近には最初の「逆茂木」が構築された。北区画では中期中葉前半まで玉作を継続し、ヒスイ製勾玉の製作も行っている。中期前葉に径 10m の貝塚が形成されるなど竪穴建物が密集する気配はないが、多数の柱穴は掘立柱建物（倉庫？）の存在を示す。一方、南区画では東北東から西南西方向に 100m 程の間隔で並行する大溝が２～３条掘削され、さらに直交する小溝で 100m 四方の小区画が設けられるなど、囲むよりも区分が基本である。谷Ａ南斜面や大溝での貝層形成は、居住域外縁に廃棄空間を設けることで内部の建物密度を高めた可能性を窺わせるし、そもそも内部区画を必要とする点は集団内部の緊張関係を如実に語る。よって、「逆茂木」をもって対峙する南北の関係も、やはり緊張を孕んだものであったろう。

・「四隅切れ」は朝日遺跡から始まり広がった

まず、朝日遺跡で中期前葉に30mを超える「四隅切れ」超大形方形周溝墓が築造され、「形」が重視されて以後の基本形となった。それが弥生中期前半（BC4～3 世紀）には房総半島まで広がり、東日本の方形周溝墓はここで《近畿圏》と分かれて独自に歩むことになる。とはいえ、濃尾平野でさえも方形周溝墓の普及は簡単に進まない。灌漑水田稲作の普及だけでは文化・社会の根本的な転換に結びつかなかったということか。

・方形周溝墓の被葬者と喪葬儀礼

方形周溝墓は規模にかかわらず最初から少数者（2 人まで）のための墓制であり、土器棺（乳幼児葬）は除外された。朝日遺跡では中規模が年少者のために造営されることさえあり、階層の違いは生得的であった。棺は組み合わせ式木棺が基本で、朝日遺跡では用材獲得に大変な困難が伴ったろう（ex.勝川遺跡：中期後葉の棺材埋納坑）。とすれば、その価値は否応なく高まる。なお、現状で舟型木棺は未確認である。供献土器が量的に安定するのは弥生中期中葉でも後半（BC2 世紀）であり、中葉前半（BC３世紀）までは出土量もわずかで種類も乏しく、壺に限られてもいない。朝日遺跡では中規模以上で鋤や鍬を数本、溝底に方位を定めて据え置いたり、木棺端材を台として置く行為が墓葬に伴い行われた。

ウ）玉作と遠隔地交流（あるいは、玉と「四隅切れ」方形周溝墓と漆黒の壺）

・玉の威力

太平洋岸では唯一、朝日遺跡で弥生中期前半に管玉（及びヒスイ製勾玉）が生産された。北東エリアの管玉製作はB技法（新しい技法）で推移するなか、何故か環濠（壕）掘削後の北区画南西の玉作工房区はA技法（古い技法）で異なる。朝日遺跡に招聘された玉作工人にも複数あって、故地との関係も単純ではないということだろうし、勾玉・管玉の素材（ヒスイ・碧玉・緑色凝灰岩）、道具一式（メノウ及び安山岩石針・紅簾石片岩施溝具）の入手先が広域にわたる点も驚きである。銅鐸鋳造を含めて、珍重品生産をめぐる広域連携システムが作動していたということか。

ところで、管玉が居住地や墓地からほとんど出土しないのは《現有》を基本にしていたからである。世代をこえて、集団をこえて保持し続けられ、単なる装身具、属人器ではなかった。管玉は「贈り、受け取り、返礼する」行為（贈与）によって人手を渡った。消耗品ではないので必要量にも限度があろう。管玉に装身具としての使用場面があったとしても、それは“祭儀”に付随する、または“祭儀”を構成する対面的な《場》であり、それを介して流通していた。あるいは“カミ”を通せば「奉献と下賜」となり、この場合には「再配分」の性格が強まって“配布者”への権威を付与することになる。いずれにしても、玉は「価値があるから交換されるのではなく、交換されるから価値がある」ことによって単なる珍重品にとどまることなく社会外部へと受容され、濃尾平野から東方へ価値共有圏を拡大した。

・「四隅切れ」の東方派及と漆黒の壺

「四隅切れ」方形周溝墓の東方波及に朝日遺跡が重要な役割を果たしていたことは、漆黒の仕上がりに加えて薄作りで軽いものを上等品とする貝田町式細頸壺の原型・摸倣型の動態からも窺える。貝田町式細頸壺は前代の櫛描紋系と条痕紋系につながる多様な要素を編集したものであり、愛知県東部から天竜川にかけて分布する瓜郷式でも象徴的役割を担い、それが東日本へ搬出されて「四隅切れ」方形周溝墓とセットになって新たな《祭儀的世界》を構築した。そこでは全体をつなぎとめるものとして玉も重要な機能を果たしたであろう。とはいえ、漆黒の壺の起源がどこにあるのか、焼成後にベンガラで赤彩する点も含めて検討課題である。

エ）住居の円と方（作法と系譜）

・外観と内部空間の違い

伊勢湾岸域では弥生前期から竪穴建物には方形と円形がある。中央穴の両側に小穴が付属する円形は朝鮮半島・松菊里型にたどるほかなく、弥生中期に継承されて６本柱円形・同心円式床面拡張の基本となった。しかし、同時に方形４本柱・対角式床面拡張もあり、都出比呂志が指摘するように両者を大きく西日本型、東日本型にまとめるにしても、伊勢湾岸域では弥生中期前葉から両者の共存が基本であり、しかも円が大きく方が小さいということもない。『魏志倭人伝』に記されたように世代差による選択であるなら、円が祖型として優位であった可能性もあるが、確証はない。玉作工房も方形と円形があり、技術的には明らかに外部だが、全てを外部に求めるだけでは問題の解決はない。

・火処の違い

円形は中央の穴を火処（灰穴炉）とするのに対して　方形は長軸中央ラインの一方に寄って床面が焼けており（地床炉）、その反対が入り口となる。地床炉には土器の底部や棒状の円礫が置かれる場合があり、前者は甕の支脚である。とすれば地床炉はもっぱら調理用、灰穴炉は暖や火明かり、そして調理用ということにもなるのだが、結論はそう簡単ではないだろう。

オ）多様な生産活動の集約と朝日ブランドの創出、そして中心化

・あらゆるものを生産した朝日遺跡

立地条件の限界を超えて朝日遺跡では多くの道具類が生産され、それを元に多様な生産活動が行われ、豊かな消費生活を実現した。銅鐸生産も可能性に過ぎないとはいえ、その一つである。そのために広大な居住地を必要としたのだとすれば、自ずと名古屋市西志賀遺跡の限界も見えてこよう。プロジェクトの実現のために“朝日の地”が選ばれた、ということなのだろうか・・・。

・朝日遺跡で始まったものとは

「朝日形」と名付けられたものには長身鏃と甕がある。円窓付土器も朝日遺跡で創出されたなら「朝日形特殊土器」といえるが、盛んになるの

は中期後葉（BC2 世紀）の転換期以降であり微妙だ。私は「逆茂木」や「四隅切れ」方形周溝墓を、さらに玉作も加える。太平洋側では弥生中期前半の玉作は朝日遺跡のみであり、まさに“朝日ブランドの玉（ぎょく）”である。

カ）朧げな銅鐸

・銅鐸紋様

中期前葉の壺紋様にある綾杉紋や横型流水紋、半円紋、斜格子紋に窺うことができるのみで、中期後葉のように土製品が出土することはないので決して身近な存在ではなかったろう。「聞く銅鐸」（田中 琢）といわれるように、うなりを伴う響きが“新しい世界の屹立”を宣言していたのなら、それを聞く側はどうであったろう。実際に銅鐸の音がどこまで聞こえたのかわからないが、往時の静寂な夜ならかなり遠くまで響き渡ったことだろう。それが日々、社会を統合に向かわせる銅鐸の真の威力であったなら。

キ）最後の「逆茂木」と「四隅切れ」超大形方形周溝墓

・「逆茂木」の実態

まず埋め込むための溝を掘削し、枝分かれしたカシの木を南に傾けて並べ「逆茂木」に、次に中央に杭を打ち込んで枝を持つカシの木を固定し、根元を埋め戻して柵列とした。環濠（壕）の深さが十分に確保できない谷 A 内では「乱杭」も設けられた。「逆茂木」は東で環濠（壕）内部にも設置され、長さは 250m を超える。カシの木はいずれも鋭い切り込みで折り取られており、まさに鉄刃の威力であった。

・超大形方形周溝墓被葬者の行方

弥生中期中葉後半をもって長辺が 30m を超える超大形方形周溝墓は姿を消した。その後にそれまでの居住域の一体性が失われて、房状の単位と中枢域からなる新たなプランが立ち上がったこと、「四隅切れ」方形周溝墓が消滅して「一隅切れ」が基本となり土器棺を含めて複数埋葬になったことは、一応は同じ場所で集落が営まれているとはいえ明らかに伝統の途絶を物語っている。ならば、朝日集落を核にして周辺地域を統率した上位層はどうなったのだろうか。従来のネットワークを利用して海路を東方へ逃れたとすれば関東まで達することは可能であるのだが・・・。

ク）弥生中期の「海民」世界と朝日遺跡

・縄文伝統に基づく「海民」文化圏の形成

縄文時代の伊勢湾岸地域は、志摩半島、知多半島、渥美半島、天白川河口域（のちのアユチ潟）、そして衣浦湾から幡豆にかけてのエリアで狩猟と漁撈が一体であった。弥生時代になって水田稲作が加わり平野部では両者の分離が進む中でも、これらのエリアでは狩猟と漁撈の一体性は保たれていたが、弥生前期後半には急速に衰退に向かう。それに呼応するように、庄内川河口域で大規模な貝塚・貝層形成が始まる。広大な濃尾平野は資源からの距離が遠く、そこで集落を営むには物資需給の安定が前提であった。それを担ったのが「海民」である。

「海民」は単なる漁撈民ではないし「半農半漁」民でもない。陸地に拠点（居住地・墓地・生産地）を確保しつつ、近距離・遠距離での漁撈をはじめとして、遠隔地をつないで人や物の輸送に携わり、主要河川を遡って内陸深く達した。まさに「海民」が朝日遺跡の大規模化を支えた。

こうした「海民」集落の形成は各地で同期しており、「海民」ネットワークが弥生中期前半に大規模集落の成立を列島規模で促した。東では安城市鹿乗川遺跡群、浜松市伊場（梶子）遺跡群、静岡市有東遺跡、小田原市中里遺跡が該当する。方形周溝墓の分布も、初期の範囲が縄文晩期に大規模土器棺墓群を形成した範囲に重なっている点が重要で、土地占有の観念と陸地に拠点を設ける「海民」との連続性もそこにある。そして、いったん方形周溝墓が「海民」の基本的な墓制となって後は、「海民」自ら、あるいは「海民」との交流によって「四隅切れ」方形周溝墓もいち早く関東まで広がる。このように「四隅切れ」方形周溝墓は単に水田稲作民の墓制という理解では不十分である。弥生中期に水田稲作を完成させた中部高地に方形周溝墓制がなかなか及ばなかったことにその鍵がある。

・《朝日文化》の高揚と国

朝日遺跡は「海民」世界の拠点の一つとして、集落設計上も複雑な大規模集落を形成しただけでなく、内部の諸関係も複雑であった。「四隅切れ」方形周溝墓が占める広大な墓域を伴う北エリアで玉が集中生産される一方、南エリアでは柵や大小の溝で区画された単位（出自の異なる集団）を中心にあらゆる資源を獲得して多様な生産活動が行われた。しかし、その南エリアの墓域は北とは全く異質なのである。とはいえ、南エリアで行われた多様な生産活動は《朝日文化》創出の基盤である。新たに勃興した「海民」社会にとって、それは目的であり、また効果でもあった。生産物が自家消費に限定されていたのかどうかも、玉の流通に付随して各地へ搬出された余地は残る。こうして独自に生み出された「朝日ブランド」を含めた全体を《朝日文化》と呼ぶとすれば、「始まりの逆茂木」と「終わりの逆茂木」によって前後を区切られ、超大形方形周溝墓もその期間にのみ存続したことの意義は大きい。多様な集団を身分秩序によって統合したそれを「倭人のアサヒの国」（国邑）と呼ぶことは可能だろうか。

・新たな時代の開幕

「終わりの逆茂木」の廃絶によって朝日遺跡は新たな時代に入った。東アジアにおける「倭国」への道程である。

*3「国邑」には「国や村に」という読み方もある。

●続編（未定）